

架蔵『島津琉球合戦記』解題と翻刻

目黒将史

〔解題〕

〈薩琉軍記〉は、慶長十四年（一六〇九）の琉球侵攻を描いた軍記テキスト群の総称である。琉球侵攻を題材にしているが、実際には起きていない合戦を作りだし、様々な武将たちの活躍を創出している。資本文化を介して、主に写本で流通し、百点を超すおびただしい伝本が残されている。そのほとんどは十七〜十八世紀にかけて成立しており、近世中、後期の日本（ヤマト）側から見た琉球像を知るための恰好のテキストである。

〈薩琉軍記〉は大きく二系統に分けられる。一つは『薩琉軍談』を基礎テキストに持つ系統（A系）であり、もう一つが『島津琉球合戦記』を基礎テキストにする系統（B系）である。当本はこのB系統の基礎となりうる『島津琉球合戦記』の一伝本となる。B系の特徴は、侵攻時の太守を「家久」とすること、島津家由来譚を島津家譜として扱い、寛文十一年（一六七二）の尚貞襲封に伴う金武王子朝興の謝恩使来朝を巻末に配することが指摘できる。

A系の基礎テキストである『薩琉軍談』との相違点は二つあり、第一は「島津氏由来之事」が「島津家久琉球責の台命を蒙る事」の後に位置づけられることである。内容も異なっており、『薩琉軍談』では頼朝の子を宿すのは「若狭局」であるが、ここでは「比企能員妹（丹後局）」になっている。生まれた子（島津の祖）も、『薩琉軍談』では「義俊」であり、この系統では「忠久」となっている。島津家の祖先が「丹後局」につながる伝説は著名であり、『寛政重修諸家譜』などにもうかがえる。また、『薩琉軍談』では、頼朝の子を宿した「局」を助ける役割を畠山重忠が担っていたが、ここでは重忠の存在がない。その他、島津の「稻荷信仰」や「犬追物」の由来などを引いている。「島津氏由来譚」の位置づけが異なっており、『薩琉軍談』では「義俊」が島津家中興の祖であると語られる、義俊の出生譚であるのに対して、ここでは「忠久」から「綱貴」に至るまでの系譜となっている。島津綱貴は島津家二十代当主であり、結末の寛文十一年の謝恩使のころには誕生していた。「島津家由来譚」と結末との付合を示す事例であろう。B系

でも網貴までとするのは、この諸本のみである。

第二の相違点は、物語の結末である。生け捕った官人たちと面会し、島津と琉球との同盟は、『薩琉軍談』とも同内容が語られるが、婚姻に關してははっきりと語られていない。それに加えて、家久が徳川家康よりねぎらわれ、褒美として「琉球」を与えられるくだりが語られ、家康と琉球王との対面まで描かれている。さらに、寛文十一年（一六七一）の島津光久と琉球王尚貞との往復書簡が引用され、琉球の「金武王子」が朝貢に来るという後日譚で幕を閉じる。琉球侵攻後の琉球の朝貢の様子を描くことは、侵攻の成果として重要な意義を持つだろう。この寛文十一年の謝恩使は五度目の江戸上り（江戸立ち）である。琉球が日本（ヤマト）へ朝貢に来るという結末は、琉球が日本（ヤマト）の属国となったことを示す重要な位置づけになるだろうが、なぜこの諸本が寛文十一年の謝恩使を結末にしているかは疑問である。（薩琉軍記）は『通俗三國志』や近松浄瑠璃の影響下で成立した作品であることは間違いなく、¹⁾（薩琉軍記）の成立が寛文十一年までさかのぼるとは考えられない。「島津家由来譚」が網貴までを描くことにより、寛文十一年という年には何らかの意味合いが込められていると思われる。この問題については後考に待つ。

この二点はB系の大きな特徴でもあり、A系の『薩琉軍談』とは異なった展開をみせる系統である。A系『薩琉軍談』とB系『島津琉球合戦記』とどちらが成立が早いかという点については未詳である。しかし、奥書からみると、B系は立教大学図書館蔵『琉球軍記』の「寛

政七年」（二七九五）までしかさかのぼることができず、²⁾管見の限り、江戸中期の写本は確認できていない。奥書のみでうかがえば、B系はA系よりは後の作品群となるだろうが、真偽は定かではない。前述の寛文十一年の問題ともども、今後の伝本調査が待たれる。

これまで確認されている『島津琉球合戦記』の伝本は以下の通りである。

島津琉球合戦記伝本一覽

- ① 小浜市立図書館酒井家文庫（六卷一冊）
- ② 京都在学（六卷一冊。冒頭に「琉球故事談」。絵あり（島津城図、琉球図））

【翻刻】森曉子「翻刻『島津琉球軍記』」（池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまなざし』三弥井書店、二〇一〇年）

③ 国立公文書館（旧内閣文庫）（六卷一冊）

☆④ 目黒将史（五卷一冊。内題「琉球征伐記」）

⑤ 立教大学（一巻一冊）

⑥ 琉球大学（二巻二冊。文化二年（一八〇五）書写。内題「琉球国征記」）

当本は④にあたる。前述の特徴を持つため、『島津琉球合戦記』に分類できるが、内容は他本とは異なっている。大きな相違点は、全体的に他の伝本より内容は簡略化されているが、佐野帯刀の遺児主水政形が遺恨戦を繰り広げる場面が追加されている点である。（薩琉軍記）は新

納武藏守と佐野帯刀との対立譚を軸に物語が増広されていく傾向がある。⁽³⁾この追加も佐野帯刀譚の増幅によるものだと思われる。他にも琉球の武將専流子の記述も増幅されている。松原の戦いで新納武藏守らを足止めする役目を担うのだが、これもやはり佐野帯刀の物語を際立たせるため、新納武藏守を足止めする必要がある、改編されたものと思われる。これらの改編によって、他本より成立がくだることが指摘できよう。

成立は古く遡らないが、他本にはうかがえない物語を有し、A系『薩琉軍談』との関わりやB系の増広本である『琉球軍記』とのつながりを考えるうえでも当本は貴重であり、ここに翻刻する。

注

- (1) 拙稿「薩琉軍記」物語生成の一考察―近世期における三國志享受をめぐる―（『説話文学研究』46、二〇一一年七月）。
- (2) 拙稿「立教大学小峯研究室蔵『琉球軍記』解題と翻刻」（『立教大学大学院日本文学論叢』7、二〇〇七年八月）。
- (3) 拙稿「薩琉軍記」の物語展開と方法―人物描写を中心に―（『立教大学日本文学』98、二〇〇七年七月）

〔書誌〕

- 〔刊写・年時〕写本・江戸後期から末期頃か
- 〔外題〕ナシ（簽・破損）
- 〔内題〕琉球征伐記
- 〔尾題〕琉球征伐記
- 〔表紙〕原表紙、無紋、藍
- 〔見返し〕原見返し、本文共紙
- 〔料紙〕楮紙
- 〔装訂〕袋綴
- 〔絵画〕ナシ
- 〔数量〕五卷一冊（五冊合綴）
- 〔寸法〕二三・七×一六・二糎
- 〔丁数〕63丁
- 〔用字〕漢字・平仮名
- 〔蔵書印〕不明丸墨印
- 〔書入〕「五冊之内」「毛利／弥兵衛氏」
「石しう／つわの／もの／やしけ氏／はほん」

〔凡例〕

- ・全体に底本を忠実に再現するのではなく、読みやすさを重視するよう努めた。
- ・翻刻は追い込みとし、内容に即して段を改めた。表題が変わる際は一行空けた。
- ・丁が変わる際には改行し、二重カギ括弧と丁数を算用数字で示し改行した。
- ・各冊の末尾は「」で示した。
- ・句読点を私に付し、会話、心中思惟にはカギ括弧を付した。
- ・返り点、濁点は底本の表記に従った。それ以外の点（底本に記された句点など）は、翻刻に反映させなかった。
- ・割注は、へで示した。底本で二字下げとなっている注、私評などは底本のまま二字下げとした。備立、分限帳などは、読みやすさを重視し体裁を整えた。
- ・宣命書は本文とフォントを揃えた。
- ・見せ消ち、墨消しは起こさなかった。
- ・本文を訂正する書入は翻刻本文に反映させた。
- ・異体字、旧漢字、略字は通行の字体に改めた。
- ・疊字「々」「々」「々」「々」「く」は開いて翻字した。ただし、「早々」のように、二字続きに用いられる「々」は活かした。
- ・天皇や家康などに対する敬意を示す語頭の空白は詰めて翻字した。
- ・底本の破損箇所は□で表した。
- ・本文の疑問箇所には（ママ）を、諸本により推測可能な破損箇所、本文の明らかな誤写については、括弧書きでルビをふった。

〔翻刻〕

琉球征伐記卷之一

目録

島津氏家系

蒙_ニ台命_一

新納武蔵守一氏軍略 』 1

琉球征伐記

島津氏家系附蒙_ニ台命_一

漢書に謂る、戦克の将は国の象牙犬馬の人を当る。則ハ、帷蓋を以て覆_レ之。況や、大切の人におゐて、ことや賞せずんば有へからすと云々。

抑薩州の史士従四位の少将大隅守源家久のいにしへをたつぬるに、清和天皇の後胤、源二位の右大将より朝の三男忠久に始て島津の氏を賜ふ。それより連綿と相伝ふ。頼朝かつて比企の判官頼員かいてもふとにかよひ情深し、これよりよつて、その室ふかく妬む。本田次郎近経を申し、かの妹をうハはんとはかる時に、本田、その罪なくして死を賜ふを哀れみ、ひそかにともなひ京師にはしる。しかれども、爰も又東土へ便近き所とおもひ、摂州へ下り鎮西へとこころさすの所に、かの姉かねて懐 』 2

胎なり。既に月満、産の氣にくるしむ。本田詮方なく、住吉へたち越、かの所にて介抱す。ほとなく一子誕生す。時に治承三歳也。

註に曰、摂州住よしに今に誕生の事跡残り。この時明神瑞あらハし、狐火及ひ白狐来て母子をまもる。是よりして島津家代々狐を以て祥獸とす、と云々。

それより近経、母子をとまなひ、安部野にしはらく居住し、そののち鎌倉に立帰り、より朝に謁す。公大によろこび、島津の荘をあたへ、相州にあり、常により朝二近仕忠貞をあらハす。建久七年大隈、日向を賜はり、豊後の守に任し、島山重忠のむすめをめどり、三男を産む。

嫡子修理の亮忠よしと号す。二男因幡守忠綱と号す。三男左衛門尉忠道と号す。その 』 3

後承久四年將軍犬追物御免の時、忠義命を蒙り、射法の故実を言上す。

註に曰、射手は伊集院左衛門尉頼長、氏家太郎敦重、同次郎泰村

二十疋也。今に至て島津家ハ犬追物射法の家なり。近代命在て、

この事に及と云々。

建久元年十月、島津忠綱高麗の山柄鳥を將軍へ献す。此鳥羽翼白キ事雲のこたく声もまた日本の鳥に異り、将ぐんはなはだ愛し玉ふ。

忠綱の二男を久経といふ。久経の息を忠宗といふ。此忠宗和哥をよくす。

風渡る泉の川の黄帯_{（帯）}に山陰涼しうつ蟬の声

忠宗の曾孫を氏久といふ。陸奥、越前の守なり。この人馬術の書を術す。嘉慶年中に卒す。氏 』 4

久に息数多あり。嫡子元久といふ。応永四年に卒す。その舎弟久豊家禄を継、陸奥守に任ず。子息を修理の亮忠国、その子明久、その子忠幸、その子忠良、その子家久なり。

慶長十四年己酉年四月上旬、征夷大將軍従一位右大臣源の家康公、京師城に於て、薩州の太守島津大隈の守源家久をめしての玉ハク、今四海一統に静謐す。そのうへ豊臣の武威によつて、朝鮮国私命にしたかふといへとも、いまた琉球国王命にしたがはず。この儘に差置時は、且武辺のかるきに似たるべきか。いそき薩州の簾下をもつて琉球征伐有へきか。帰陣のうへに於ては、琉球一国すべて薩州の支配たるべき旨、家久謹て領掌し、急ぎ本国にかへり、子息光久及び良従めし集め、琉征の軍評まぢまぢなり。

時に 『5

家臣新納武蔵守一氏、席を進ミ、琉国要害の体、逐一に言上す。「抑琉球国海陸百七十里、舟の揚り場に関所有り。この所を要溪灘と号す。それより五拾里過て城郭あり。五里四方にて前に川水流岩石そびへ、大瀧ミなぎり落、この城より十里へたてて、南方三里四方の山城地あり。夫より海上十里を過て、西の方に二里四方の島有。是米穀をおさめおく所なり。倉百七拾十ヶ所はかり有り。号て米倉島といふ。又左りへまはりて一島あり。是を乱蛇島と号す。関所あり。それより五里はかり行て松原有り。この中に平城有り。爰を過テ三里はかりゆけば、高サ三拾四丈の揚土門有り。次に又楼門あり。高鳳門と号く。その次に鉄石門といふあり。この所には常に千人の兵士、番手を組して弓、

鉄砲をかまへ、嚴重に備フ。是より 『6

西のかたは、ミナ商人、職人、軒を並ぶ。この所東西凡百五十丁計、夫より一ツの門有。是より諸官人、大小軒をならへたり。この間二里はかりをすきで、石垣高サ二丈計の惣築地あり。廻りに大堀を構へ、凡方四里の城郭に八十二の橋を懸る。後は日頭山とて高山あり。この山を越て八里はかりに、うしろ詰の城あり。此所を琉將王俊辰亥といふ者、三萬騎にて守る。その外所々の番所番所かそふるにいとまあらず。それかし若年の砌、かの地へひそかに趣き、地見の大略かくのことし」と演説すれば、満座の諸士一同に耳心す。

大將家久、大に感じ、「是に武蔵守か察智高考、頗る弓箭の知識と謂つへきをや。今度琉征の元師をなんちに授るの條、一戦に切靡け。凱哥を不日に揚へし」と、三尺二寸、金作の太刀を抜き、 『7
前なる三方をきり割りて曰、「列座の面々、今度新納武蔵守一氏、琉征の元師たるの間、かれが指揮にもかく族は、一々かくのことくたるへし」と、太刀を新納に賜ふ。時の面目身に余りて、一氏、御前を退出ス。諸士一同に武蔵の守に随心す。

新納武蔵守一氏軍略

斯て慶長十四年、琉征大元師新納武蔵の守一氏、嫡子左衛門の尉一俊を相具し、御殿の上段に座す。照柿の熨斗目、水色の大紋、鷲の丸の紋所、紫色の露結ビ下け、大將より賜りし三尺二寸の差副に、銀の采配を持ちたり。正面の懸け物、中尊は大公望、左ハ九郎判官よしつ

ね、右は楠庭尉正成なり。花瓶、香炉、御酒、洗米を備え、金作の宝
劍三振 』8

立ならへたり。

時に宗徒の諸士装束をあらため、異儀をただし、役儀の甲乙録の高
下、家々の格式をもつてす。武蔵の守、執筆本間藤左衛門を以て軍配、
役義等、ことごとく記録す。

條々

今度琉球御征伐之被_レ蒙_二台命_一ヲ、依_レ之、蒙_二君命_一ヲ、新納武蔵守一氏
為_二軍師_一ト、諸士一命非_二塵芥_一ニ、可_レ抽_二忠勤_一者也。依_レ之、記録如_レシ
件。

琉球大元師新納武蔵守一氏判

録十二万石

第一備 種島大膳豊明 録八万石

鉄砲 三百挺 足輕 九百人 内頭五人

弓 三百張 同 九百人 右同断

鏈 三百筋 歩武者六百人 頭二人

騎馬 三百人 頭二人

熊手 三百人 頭二人 』9

飛口 三百人 同

太鼓 三十人 同

鐘 三十人 同

楯 二百人 同

力者 百人 同

棒 二百人 同

第二備 畑勘解由道房 録五万三千石

列右同断

同押へ 秋月左衛門尉之常 録十万石

列右同断

第三備 江本三郎左衛門尉重躬 録五万三千石

烈同断

第四備 松尾隼人勝国 録十万石

烈右同断

第五備 佐野帯刀政形 録七万石

烈右同断

押 新納武蔵守一氏

馬廻り騎士 上下二百人 』10

花形小形部氏頭 一万石 二百人

三好典膳定俊 一万石 二百人

花房兵庫忠道 一万五千石 三百人

池田新左衛門国重 一万八千石 五百人

小松原左内左衛門忠信 一万五千石 二百二十人

浜宮藤内行重 一万石 二百二十人

二里波門定治 一万石 二百二十人

島浦主水時信 一万石 百五十人

矢島甚五左衛門豊宗	一万石	百五十人
大島三郎左衛門忠久	一万石	百八十人
天野新兵衛近	一万石	二百人
篠原治部久春	七千石	百人
中将左内春氏	五千石	七十人
中村左近衛門牧冬	五千五百石	八十人
和氣治左衛門国春	五千八百石	八十五人
木戸清左衛門藏永	五千石	七十三人
惣押人数上下四百人。是は武藏守備、押への後軍なり。		』 11
小荷駄奉行 米倉主水清友	二万八千石	人数不知
小荷駄	千六百五拾五荷	人数不知
車	十五輪	二百人
後陣		
鈴木内藏助重郷	上下千人	
吉田主膳	百人	
有馬内記	百人	
氏江藤右衛門	百五十人	
桜田武衛門	二百人	
大和田形部	三百人	
小浜勝右衛門	二百人	
前田十左衛門	百人	
長谷川式部	百人	

横須賀左膳	二百人
今井半藏	二百人
内本半之右衛門	二百人
惣目附役	
永井鞆負元勝	二千人
岸左門	百人
向井権右衛門	二百人
太田庄左衛門	百人
亀井藏人	百人
玉沢十内	二百人
川端主水	百人
道明寺外記	二百人
関段之丞	三百人
中川大助	百人
佐久間喜大郎	二百人
惣人数	四萬六千八百七拾三人
替り脇備人数	三万人
都合七万六千八百七十三人	
此外	
島津大内藏	一万人
同 <small>(左京亮)</small>	二千人
同 左京	二千人
同 主税	三千四百人

』 12

同 内匠 千人 『13

同 左近 千人

同 玄番 三千五百人

同 主殿 千百人

同 監物 千五百人

同 采女 五千人

同 左京 五百人

右之十家ハ、島津氏家門衆にて大名と称す。

惣人数、都て十万五千八百七拾三人。

凡島津家の広大なる事、他より察慮のおよふ所にあらず。その大概をたすぬるに、拾二万石以上の家、五、六家、一万石以上、六、七十家、千石以上百人はかり、その外惣して、家中へ知行するところ四百万石余と云々。

琉球征伐記卷之一終 『14

琉球征伐記卷之二

薩州兵琉球へ乱入

千里城夜軍附和軍敗北 『15

琉球征伐記卷之二

薩兵琉球へ乱入

去ほとに、薩州軍倍一勢に調いしかハ、慶長十四年五月下旬、鹿児島

島を雷発あり。交野浦より兵船に取乗、鬼界か島に渡り、一日逗留有り。翌日、おのおの舟をうかめ、万里の波上を捲にもんで押すほとに、不日にして琉球国の要溪灘に近く、物見の兵、元師の舟に来て曰、「是より遠目かねを以てうかこふに、要溪灘に乱杭、逆茂木を引、要害堅固の体に相見へ候」と申す。武蔵の守、衆にむかつて曰、「切所の要害さそ有らん。しかし、敵の謀もあらんかと、此所に遅滞し日を送らば、却て謀計をあとふるな覽、おもふに不意の事なれば、いまた番兵なども墓々しかるまし、元来兵ハ」 『16

迅速をたつとむなれば、いさや一当、当テ見ん。先手の兵は銅の笛、貝鉦を鳴し、つつゐて鉄砲をうち込へし。敵周章の色見えん時、各鐘を入て突ミたし、騎馬をもつてかけ崩せ。かならず敵の首級をのそむ事なかれ、只うちすてたるへし。逃る敵に追すかふて、千里山まで押詰よ。しかれども、此山の麓に陣をとるは、軍法に忌所なれば、三里に野陣を備うへし。王都へ五十里といへども、一里六丁の積なれば、心易し。いさや進め」と下知すれバ、先鋒種子島大膳の旗下に、向坂、柴口、和田、菊地、原田党、早雄をの面々、我おとらしと鉄砲を引携引携、要溪灘と近付ハ、千里山まで纒三十丁はかりなれば、只一揉にうち破レと、櫓楫をはやめ押ほとに、はや南の 『17

岸に着と等しく、先手の鉄砲三百挺一度にはなしかくれれば、あたかも百千の雷の一度に墮るかごとく、くろ煙天を蓋ひ敵音地に響く。この要溪灘ハ琉球の守袖將軍陳文碩か旗下に范俊喜といふ者、纒三百騎にて在番したり。今日薩勢不意に来ルへしとハ夢にもしらす、殊

さら大軍に気を取りひしかれ、周章大かたならず。先陣の大將種か島大膳笑壺にいり、「時分はよきそ。蒐れや者とも」と下知すれば、何かハ以て躊躇ふへき、おもひおもひに鎧を入れて突乱す。引つつゐて騎馬の勇士三百余騎、鑣をならへてかけたつる。その有様、偏に水象の浪を割、蒙古の竹林を出ることく憤然として当りかたたく、更に刃むかふ者もなく、唯右往左往に敗走す。血ハ流れて広原を 』 18

浸し、骸は積んで岳をなす。大將陳文碩大におとろき、急き千里山江早馬をうつつて救をかふ。されとも薩軍短兵急に取懸れば、詮方なく残兵をしたかへ行方なく乱散る。薩兵ハ手合せの軍おもひの儘にうち勝、逃ル敵に追すかふて、千里山にと押逐ル。

この城は大將孟龜靈といふ者、三千余騎にて固めたり。臣下に朱伝説といふ士あり。衆を抽んで曰、「今度倭軍不意発つて要溪の切所うち越、既に当城を襲う。いそぎ都へ早馬をうつつて救ひを乞、その間城中敵しく守り、猥に出て戦ふ事なかれ。思に和兵、適疏地に来てつてまた地理案内くハしからじ。夜にいらバ臨機応変の術有へし。且後詰来りなば、内外より挾てこれをうたば、和軍を敗 』 19

せん事案の中なり」といふ。孟龜靈、是を聞、尤しかるべしと、四方に柵を振り、矢間に鉄砲、石火矢をそなへ、はや馬をうち、急を告る所に、寄手の先陣種子島大膳豊明、一陣畑勘解由道房、同時に押よせ、関の声を揚るほと社あれ、鉄砲をうち懸、喚き叫て攻立る。されとも城中鎮りかへつて音もなし。薩兵、おのおの勇をなし、「さては大軍にききおぢして落うせたるか。只しは臆して出さるか。何にもせよ、た

だ一息に揉潰せ」と、各城をおつとりまく時、日既に西山にかたふく。新納武蔵守、この体をはるかに見て、「短兵急に乗いれ」と軍使を以て下知をなす。

第三にそなへし秋月右衛門尉行常、「軍は夜にいらん」と察し、兼て投松明を用意し、しつしつと集ミ寄なされとも、 』 20

將官孟龜靈ハ萬夫不当の勇將、殊更謀臣朱伝説、智ハ孫子カ肺肝を出、謀ハ良平をも欺くほととの者なれば、弱能強を制するの術をもつて少しもさハかす持堪ふ。寄手も少し責あくんと見へし時、日既にくれければ、三里退て陣を取、遠簀を焼て夜をあかす。

千里城夜軍附和兵敗北

斯て城中にハ朱伝説カ謀にて、終日防戦に目をくらす。伝説かねて倭の軍中へしのひを入レおきたれハ、能々見積り、その夜の三更に、程兵五百余騎を勝つて、各投松明ニ火攻をそなへ、城の東門よりひそかに押出し、軍場遙に見渡せば、衆星北に拱し、四更に近くなんなんとす。伝説下知して、「時分ハよきそ。打 』 21

入」とて、薩軍の端備ハ松尾隼人勝国カ陣所へ笑酌もなくうつて入、鉄砲を放し蒐立る。味かたにも兼テ油断はせされとも、目さすもしれぬくらき夜に、いまた見馴ぬ疏地に入方角とてもさたかならねバ、少し漂所を得たりや、応と一同に投松明を打ちこめ、手々に火箭を射懸たり。さしもの松尾の兵、数多うたれ、是非なく佐野帯刀カ陣へ乱か

折ふし風はけしく、炎天をこかし、黒煙り地を蓋ひ、佐野か陣へも火懸りけれハ、これより薩兵大に騒動し、爰かしこに乱れ散て、大に戦ふ。佐野か手下の士、沼田郷左衛門秀虎と名乗、只一騎かけまハリ、敵十七、八騎伐ておとし、近付者を靡まハる。爰に孟龜靈か一族に孟飛炎といふ大強の勇士、』22

馬を飛してかけ来り、一丈八尺の鉾をおつ取のべ、郷左衛門に渡り合、一往一來切むすぶ。飛炎ハ項羽かいかりをなせバ、秀虎、朝比奈か勇ミあり、互に秘せし所なれば、七転八倒して相戦ふ時に、飛炎鉾を捨て沼田をつかんで中にさし揚げ投んとす。秀虎、心利の勇士なれば、のけさまに飛炎か面頬、割れよ砕けよとうちこんたり。大事の痛手なれば、堪らす馬より落るを、おこしも立ず首を取上る所へ、琉兵数十騎かけ来り、郷左衛門を引包ミ、八方よりうつてかかる。佐野帯刀是を見て、威多天のことく蒐来り、「郷左衛門をうたすな」と大音揚て飛かかる。琉兵かなはしとやおもひけん。沼田を捨て乱レ散る。伝説かはも流石に小勢なれば、手かろく軍を引』23

帯刀政形齒かミをなし、敵の跡を喰留メ、直に城中に付入にせんといさミかくる時に、元師武藏の守より軍使来り、高こゑに呼ハつて曰、「今夜の騒動、山手の陣屋よりことごとく見とどくる所なり。物見の怠り不届千萬。別して佐野帯刀の組下、遠見役の者とも、急度制法をくハへられしかるへし。さて明朝ハ勢を分、これより巽の方七里去て虎竹城といふ有り。此所へむかふべし。まづまづ今夜の戦に手負、う

ち死の姓名を記し越さるへし」となり。帯刀承り、則、うち死、手負の者悉く姓名をしるし遣す。

討死の分

蜂屋藤内 和久佐右衛門 大田作之右衛門

中西主水 島村宇兵衛 泰村権兵衛 』24

新原伴右衛門 向井玄番 田中久兵衛

右ハ鉄砲組、弓組のうちなり。

玉木八左衛門 沢部常右衛門 塚本小伝治

矢辺矢柄 佐和六左衛門 左江泉右衛門

以上、侍分十六人、足輕五十七人、雑兵二百七拾九人

手負十一人、都合三百六拾三人

琉球勢うち死、三十六人、手負数は不_(ト)知と云々。

武藏守、書付を一覽し大に怒り、深く帯刀を罪を問う。政形、答に後譽を以てす。是より兩人互に憤心を懐く。

まことや諺に両雄並立時ハ、かならず一雄亡ぶと聞なるかな。此後日頭山の合戦に於て、佐野政形比類なき名譽をあらハし、討死して恥辱を雪しハ、此懷報とそきこへたり。』25

琉球征伐記卷之二終 』26

琉球征伐記卷之三

目録

虎竹城に一氏破_(ト)琉兵_(ト)

附琉將張由幡血戰

乱蛇浦松原琉薩大に戰

附孔山郡敗死 』 27

琉球征伐記卷之三

虎竹城一氏破琉兵^一

去ほとに、新納武藏守、千里城にハ押への人数を差置、夫より巽の方虎竹城へと雷発す。先備は里見大藏英久、人数二千三百余人、次に備畑勘解由道房、その次、江本三郎左衛門重躬、後陣ハ新納武藏守一氏、自衆軍をひきゐて進みよる。この所ハ琉王の一族李將軍貞国候慶善旗下の張由幡、石徳札、降子松、林玄的などいふ云万夫不当の勇士、凡軍卒一万五千はかりにて櫓こもつたり。

追手搦手同時におしよせ、おめき叫てせめたつる時に、大手の櫓より武者老人大音声を揚て曰、

理劍爰当如是未聞琉国元於薩国無仇然理不尽取圀者汝等 』 28

忽以磐如碎雞卵自滅無疑迅速可退ト云々

左有レとも、聴なれぬ琉言なれば、さらにはわからず。爰に里見か組か下に浜崎与五左衛門といふ士、諸国の言語を通達しける故、是を聞取、一々書付を以て武藏守方へ告る。一氏はを見るに、「琉言に曰、軍勢をむけらるる事、是まで見ざる所也。元来琉球、薩州へ敵対したる事なし。併しなから、理不尽に攻らるるに於てハ、磐石をもつて卵を砕くかことくせん。自滅うたかひなし。速に退くへし」となり。新納大に

笑つて、「きやつハ琉球の弁舌者と見えたり。言をもつて我をとりひしかんとの調略ならん。その儀ならば、無二無三に攻やぶれ」と下知すれば、早雄の若 』 29

侍、我もくとかけ出し、兼て用意の梯を堀へはねかけ乘いらんとす。城中にもたくハへおきたる大木、大石、雨のことに投出せば、是か為に死傷の者多し。されとも勇きつたる味方の軍卒、すこしもひるまず、乗越乗越、既に堀際まで押詰る。城兵も爰をやふられしと弓、鉄砲を申しけくうち出し防戦す。去に依て、味方暫時に手負、死人の山を築。

武藏守是を見て、かくては味かたの兵多く失せんことを愁、即時に下智を伝へ、近辺の民家をこぼち埋草をとりよせ、暫時に三方の堀をうつむ。そのうへに取登り、火箭を射かけ、数千の火玉を飛せれば、城内の陣小屋に火燃付、黒煙地を蓋ふ。城中是におとろぎ、 』 30
右往左往に周章す。寄手、この体を見て、時分はよきそといふ儘に、同音に鬨を發し責詰る。火勢鬨の聲に相和して、ほとなく猛火盛に燃上り、早本丸にも火懸りぬ。

李將軍慶善も詮方なく、劍をぬきて、自刎んとす。張由幡、急に押留、「それかし命の中有は努々御生害有へからず。一方をうち破り、君をおとし奉覽」と、慶善を守護し、南門を開キ蒐出す。薩州勢是を見て、横須賀久米右衛門、向坂千左衛門、関段之丞と名乗、その外騎馬武者三拾騎、大將軍と見てければ、我うちとらんとおつ取巻。張由、大キの眼をいからし、方天戟を舞してうつて逐る。その威風憤然とし

て、当かくる関、横須賀、向坂の三士、爰にして討死す。残兵八』
方へ蒐散し、君を守護し落てゆかされとも勝ほこつたる。味かたの大
軍、追々にかけ来り、行先道をさへきつて、稲麻竹圍のことく盛氣勃
然として、昔の張子龍か再来とも謂つへし。難なく一方をうち破り、
飛かことくかけ抜て、米倉島に続きたる渚にそふてうつて出、小舟に
取乗押出す。

かかる所え武蔵守、十文字の鍵ひつさけ、馬を飛せて蒐来り、大音
声を揚て、「海手の小舟は李將軍と相見えたり。あれうち取て、恩忽に
あつかれ」と身を揉て下知する所へ、種か島大膳、宙を飛せてかけ付
ケ、「先鋒豊明、是に有。李將軍を生捕ん」と早舟に取乗て、飛かこと
くに追蒐る。既に間五、六十間斗に見なし 』 32

三十目玉の鉄砲、雨のことくうち懸る。張由ちつともさハかす、李將
軍を舟庭（庭）に隠し、我身を楯になし、揉に揉ておして行。天その忠貞を
感じ玉ふか、大膳か乗たる舟、十分に張たる帆繩切して水に入。その
隙に張由か舟、漸こきぬけ、虎の口を脱れ落て行く。豊明、齒かみを
なし、身を揉所へ、新納が兵舟、追々漕来り、この体を見て、武蔵の
守嘆して曰、「嗚、張由、琉球無双の英雄と謂つへし。天かれか忠烈を
かんし、幸に脱る事を得たるならん。臣たるの道、誰もかくこそあり
たけれ」と感賞数声、軍を納めて陣を張る。

乱蛇浦松原琉薩大戦

去ほとに、薩州勢、二手にわかつて押よする。乱蛇浦へハ秋月右衛

門の尉之常、花形小形部うじ房、三好典膳 』 33
定治、花房兵庫忠道、池田新左右衛門国重等、先手の兵士三千余騎、
松原道へハ、大崎三郎左衛門忠久、天野新兵衛近俊、篠原治部久治、
中将左内春氏、中村左近右衛門政冬、和氣治左衛門国秀、木戸清左衛
門信秋、後軍は元師、衆兵を将ひ、進見行。

乱蛇浦の大將、孔山郡師といふ者かためたり。翌日午の刻、魁將秋
月勢、乱蛇浦へ着と等、はや鉄砲をうちかけ、関の声を揚て押かくる。
城中よりも、弓、鉄砲をうち出し、爰を詮とふせき戦ふ。池田新左右
衛門国重、獅子憤震の勇をなし、一番に鍵を入れるれば、是に続て鈴木
三郎左右衛門、三津判兵衛、間源八、関大太郎、野木団作、大館専蔵、
我おとらしと鍵を入れて突ミたす。

かかる所へ力者組の中より、阿部熱太郎、東条八兵衛、村上強八、
笹 』 34

尾十蔵など大力の壮士、手々に鎖、大槌をもつて扉も柱もうち崩ち、
四方より火をかくる。此勢に堪かね、城兵（兵）四角八方へ散乱す。大將孤
山、弓折れ、箭尽、西門より逃出、馬を打てはしる所へ、花房兵庫か
家臣玉沢与左衛門是を見て、諸鎧をあわせ、のかさじと追逐る（追）。元来
玉沢精兵の手垂なれば、只一箭に孔山を射落し、首を取てさし揚げ、
天もひひけと大音声をあけて、「乱蛇浦の大將孔山郡師といふ者を、花
房兵庫忠道か郎等玉沢与左衛門武繁うち取たり」と呼ハつたり。大將
亡ひ、残党まつたからず、乱蛇浦終に落城す。その夜、武蔵守、玉沢
に対面し、今日の城攻第一の功を賞し、即座に金作の太刀一振をあた

へしとなり。

去程に、松原 』 35

道へむかひし輩、道筋の小城小城を焼うちにして、進ミ行事五里はかりにして一城あり。是すなハち琉球の探題武平侯林浜、三千騎斗にて楯籠。遠見の者、斯とうつたふ。林浜、衆を集め防戦の軍義をなす。門下に専流子といふ賓客あり。よミよく天文に通しても、能々地の利に達す。けんせんとして曰く、「予きく、民呵政にくるしむ刻バ、天不正の氣を降す。当時の形勢、将おこり、君おこたり、当に天運順環して、琉朝命をあらたむるの時節至來せり。今薩兵遠路を來つて城々を襲ひ伐つ。その鋭氣当るへからず。見たりに出て戦ハんとせハ、都て敗をとらん。その方寸のはかりことを以て、暫は堪へし。君御隙に皇城へ駕をはせ、 』 36

大王の安否を見届け玉ふへし。予亦君の安否をきかん中は、当城を敵に渡すことあるまし。凡はかりことハ密なるをよしといへば、君皇城へおもむく事は深く包、臨機応変の謀略有へし」と云。林浜、元より専子か神機妙算有事をよく察し、防戦の指揮、ことごとくかれにまかせ、その身ハ皇城へ趣くよういをなす。 』 36

琉球征伐記卷之四

目録

日頭山合戦

附佐野帯刀戦死

』 37

琉球征伐記卷之四

日頭山合戦附佐野帯刀戦死

かくて松原道へむかひし輩、道々の小城を乗取り、その勢風塵をまひてきそひ来る。城将専流子、元來孔明か腸に分入たる名将なれば、ちつともたゆまずして、軍士に令を下し、八門金鎖の陣を布く。武蔵守、敵中にその備へ有を見て、即時に軍令をなし、陣を鸞翼にそなへて進ミよる時に、乱蛇浦へかかりし秋月勢、敵城をかけくづし、勝ほこつたる大軍、あたかも大浪のみなきることくおし來り、只一息に乗破レといさミかかる。

爰に佐野帯刀政形は前の日、千里城の合戦、朱伝説に夜うちせられ、軍事をあやまち、大将武蔵の守と不快な 』 38

れは、いかにもしてこの恥辱を雪とおもひ、此度皇城の一番乗を心懸、兼て生捕置たる敵卒に地利の案内をよく聞取、ひそかに良従を集めて曰、「予きく、先んする時は人を制し、後るる時ハ人に制せらるると云々。前日千里山の敗軍、新納か誘言、予が骨髓にたつする所なり。去によつて今よひ九死一生の戦をいたし、前辱をつくるハんとおもふ。幸に案内ハきき置つ。是より本軍に引違ひ、間道をめくつて、ひそかに日頭山へ取登つて、帝城を目の下に見下し、頂上よりさか落しに蒐落し、無二無三に乗込ン。左あれば、この戦においてハ萬に一ツも命を全ふせん事かたかるへし。旁の異見いかか有」ととふ。倉橋伝左衛門へ七百石、三好八 』 39

左右衛門（五百石）、衆評をまたす進み出、「御尤におほへ候。武門のはけミ、尤こう社有へけれ、しかし、千里山の敗北は、すこふる戦場のならるにして、あなち殿の制法拙きならず。なかんつく、武州の双言時に取つてハ武辺の一筋ともいふへきか、左有るに於てハ怨心をなためられ、百戦百勝の御術こそあらまほし。臣聞、天子は私のいかりを以、公事をあやまたすこそ承り候」といさめたり。帯刀、その時色を正して曰、「それ四方に使用して君命を恥しめさるハ、臣たるの道と云々。抑本国を出より、今度の戦場において武勇をあらはし、英名を後代に伝へ、君の応言に預らん事、人々懇望の所なり。とふに琉征数日、漸々数城を傾け、残るハ皇城はかりなり。臣等 』40

の諫たる事なれとも、国にかへり何面目有て、君面に対せん。且ハ武辺の勇なきに似たり。それかしに於てハ、一向手詰の一戦を懸ん」と、寔におもひ切たる形勢、面容にあらわれ、諸士いさむるに詞なし。

時に横田嘉助、和田東右衛門、加藤弥兵衛、鈴田八郎治など若手の英士かたはらにひかへしか、走馬にむちをくハふることくおとり出、「君の命すてに窮る。不得心のかたかた立去玉へ」とよハわれれば、何かハもつて遅くすへき、はやり雄のわか武者、我も我もと進いで、帝城の先かけて討死せんといさミ立。政形大によるこひ、究竟の英士八百余騎を勝つて、残る軍勢をハ二男主水政常（十七才）に附ぞくす。遺命ハいにしへの楠公嫡子金吾正行へ庭訓の詞をもつてす。

かくて用意一精に 』41

そなはりしかハ、程兵八百余騎、魚鱗にそなへ、その夜の三更に高鳳

の門のうしろなる日頭山に取のほり、帝城を一目に見下し、時分ハよしといふ儘に、鉄砲うちかけ、同音に関をとつと作りかけ、日頭山の頂上より逆落しに蒐おとす。その勢恰も、らいていの轟ことくなり。城中かくとハおもひもよらず、「こハいかに、孤軍天より降たるか」と、おのおの周章大かたならず。寄手の大将佐野帯刀、鎧一ツ縮し、真先にかけ出、大音をあけて、「大日本薩州の太守大隅の守家久の家臣、佐野帯刀橘の政形、琉球王城の一番乗」とそ呼ハつたり。相したかふ軍勢、おのおの今よいを限りとおもひきつたる勇士なれば、殺気天を突キ、その勢けつぜんとしてあたりがたし。和田東右衛門、鈴田』42

八兵衛、一番二番に鎧を入レ、鎧下の高名す。程なく惣懸りに押詰メ、難なく城門をうち破り、我も我もと乗込たり。

佐野か郎等に横田嘉助といふ大強不敵の壮士あり。能首とらんと、爰かしこをかけまはり、官人啞人をとらへ、「此陣屋の大将は何者ぞ。

なんぢ案内せよ。左なくバ忽うちころさん」といふ。官人おとろき領掌し、すなわち嘉助を伴ひ、別館に至り、「此内こそを李將軍の舎弟李子発の居所なり」といふ。嘉助よろこひ、うかかひ見れば、ともし火明らかにして、李子発、床几にかかり剣を抜持ち、左右に官士引副たり。嘉助、着たる甲を鎧の石突にくくりつけ、内へ入てうかこふ。子発、長剣をもつて是を伐るに、誤て天上へ切付たり。嘉助、得たりとかけ入り、李子発を突倒ス。 』43

両臣、嘉助に渡り合。戦ふ所へ、和田藤右衛門かけ来り、終に両官を伐る。嘉助、子発が首をとつておとりいて、「陣屋の大将李子発といふ

者を、横田嘉助うち取たり」とそ、よハわりける。佐野帯刀、聞とひとしくかけ来り、扇子をひらきあふき立て、「天晴、汝ハ我か公時なり」と賞す。

子発うたれしときこへしかハ、琉球いよいよ騒動し、上を下へとひしめく所を、佐野か兵、得たりや、応と矢叫ひし、四方八面にきりまくる。武平侯林浜もこの陣にくハハリしか、乱軍の中に命を没す。残る官人、散々に皇居をさして逃て行。

佐野帯刀、皇城の関の紋をおもひの儘にうち破り、「尚、先登りの形勢、新納か方へ知らせん」と、士卒に命し、館舎をうちこぼち、火をかくる。折ふし 』44

日頭山の山おろしはけしく吹て、ほとなく陣所陣所へ火うつり、猛火さかに燃上る。皇居に近き町人、百姓、かのおとにおとろき、「こハいかに成行事よ」と、老たるを助け、おさなきをいたき迷迷ふ。浅間しかりし形勢なり。政形、和田藤右衛門、横田嘉助よび、「汝兩人、いそき松原道へはせ行、武蔵守に対面し、政形こそ今宵帝城の一番乗りを仕候也。いそき帳面にしるし玉ハれ」といい賜り、その身は直にからめ手の城へとはせむかふ。

此所は大師王俊、玉後辰亥等たて籠、しかも無双の要害なれば、帯刀、矢たけにおもふとも、かなふへくもあらされとも、今度の戦ひ、ひとへにうち死とおもひ切たる事なれハ、強敵を事ともせず、衆軍を勇めきそひ、かかるその鋭氣、勃 』45

然として、あたかも雷光のけきすることく、時に大手の櫓より大音に

よハわつて曰、「城将王俊、勢ひ窮り、和軍へ降んと、去ながら城中、大勢なれば、暫く関城の間、虎口を退き玉ふへし。今よひ二更の比、城をひらく。降参仕覽」とそ、よハわりける。政形か運命窮断にや。是を諾し、十五丁退て陣を取。王俊、「仕すましたり」と、よろこひ、

「今よひ、敵陣を夜うちにし、一人不_レ残うち取、大王の御感にあづかれ」と、士卒に令を下し、合ヒ詞をさだめ、王俊、千五百騎、後軍ハ流蘭、三千余騎、惣勢都合五千余騎、人馬に牧をふくませ、火箭、投松明など、頗る火攻の具を備、しづしづとうちよせ、帯刀か陣をあたかも鉄胸のことく取りかこみ、同音に関をあくるとひとしく、鉄砲、火矢を射かけ、 』46

焼竹を積んで、散々に焼立る。佐野か兵、一昼夜の戦に、身力疲れ、その上、敵将降参といふに心ゆるし、陣中備へなし。されとも義を金石に竟へし勇士なれば、ちつともさわがず、敵を迎ふ。政形、程兵を前後に順へ、大将王俊かひかへたる千五百余騎か真中へおめみてかけ入。巴の字かり廻り、十文字にかけ通り、七転八倒して相戦ふ。その心ひとへに、大将とちか付組んと思ふに有り。されとも王俊はかり事、衆に越へ勇氣無双の大将なれば、備をかためて、能々戦ふ。佐野か勢残りすくなにうちなされ、その身も痛手数多負ければ、今はこれまでと忍ひの緒をきつて捨て、兜を脱て、大童になり、千変万化と手をくだき、死にくるひに成て相戦ふといへども、従兵次第に被討、 』47

殊に後軍流蘭か勢おち重り、竹圍のごとく追取こめ、一人も残さしと責立れば、慍むへし。政形、乱軍の中に命をおとす。大将、斯と見て

ければ、残兵、何かためらふべき、我も我もとかけ入かけ入、一人も
のこらず討死し、骸ハ戦場にうつむといへども、美名ハ後代に伝へた
り。

琉球征伐記卷之四畢 』 48

琉球征伐記卷之五

目録

新納帝都を責る

専流子節に死す

附佐野主水勇戦

琉球評定

諸將凱陣 』 49

琉球征伐記卷之五

新納帝都を責る附佐野主水勇戦

去ほとに、松原の城将専流子、希代の妙術を以てにいか大軍を防
きこぼむ。薩州、一氏、見たりに責時ハ、兵士を多く損せん事をうれ
み、ひそかに籌策をめくらし、水の手を断ち切る。城兵、是により、
心身を苦所に、和の軍、間道を廻つて、早帝城へ責いるよし風聞する
とひとしく、皇城の方にあかつて、大きに火の手を揚る。ほのう、天
をこかし、関のこゑ、矢叫の音、手に取ことくきこゆれば、城兵、大
に色をうしなひ、あきれはてて見えし所、武平候林浜も乱軍の中に討

死ときこへしかバ、専流子、今ハ是までとおもひ、士卒をもつて敵陣
へ謂つて曰、「城 』 50

将専子、運命爰に窮り、速に自殺せんと欲す。開城のうへ、残卒助命
の義、都督の愍心仰くのみ」と、新納これを聞、大に感し、「専子降参
のうへは、将士とも一統に継命子細あらし、努々生害の義あるへから
す」と返答す。専流子、涙をうかめ、「敵ながら天晴智仁の大將哉。去
ながら、我存命の内、当城をひらきなハ、言葉を盗むの徒なり。塚下
に於、何を面目としてか林浜に見えん」と、頓て門櫓に登り、薩勢に
向ひ、懇に継命の恩を謝し、劍を抜て、自首刎て死す。憐むへし。流
子、表に江山の秀を聚め、胸には怪天の機を蔵す。その外、林子か賓
客として、一言約誓の中儀の為に命を没す事(ママ)を。

斯て皇都の大変、一時に流布し、所々の城々以外の外ニ騒倒 』 51
し、大王の安否覚賀なく、我も我もと守城を捨て、帝都をさして乱レ
ゆく。依之、諸城、累卵のこく潰れ、瓦の如く碎けて、薩兵一同に押
来り、新納か勢と一手になる。惣軍あわせて拾萬余騎、風史雲を捲き、
山口月を吐くかごとく、その勢、りんせんとして、逆浪の漕るにこと
ならず。

爰に佐野帯刀か次男主水政常、行年十七才、父の戦死をきくよりも、
恨気むねに満ち、何として王俊をうつ取、この無念をはらさんと家の
子、横田嘉助、和田東右衛門を初め、加藤才藏、鈴田兵八、三好大六、
倉橋作内、并二従兵、沼田郷左衛門秀虎、堤団右衛門定明、その外程
兵前後に随えへ、惣軍、皇城へ着とひとしく、自余の敵には目もかけ

ず、大師王俊か籠たる詰の城へとかけ出す。引續て、秋月 』52

右衛門の尉行常、大軍をひき并進ミよる。兼て主水か心を察し、父の怨をうたさんと敵城をおつ取まき、一人も残さしとひかへしか、主水是を見て、勇進ミ真先に馬をおとらせ大音揚げ、「先夜、賊徒にの姦計におち入討死せし、佐野帯刀か次男、同苗主水政常、生年十七才、今朝より父の怨とうつ」と呼はつて、一文字に突かかる。つつみて沼田、和田、横田、堤、倉橋、加藤、三好、我劣しと鎧をいれ、散々に責戦ふ。城中もさすか有る勇士なれハ、爰を詮とふせき戦ふ。血ハ流れて、時ならぬ城外に洩をなす。詰にひかへたる秋月右衛門尉、主水に手からを只取巻たるはかりにて、固唾をのんて見物す。取分主水ハ俱不戴天の一戦なれハ、切レ共射れとも、事ともせず。東西にはせ通り、南北に 』53

追なひけ即時に十三騎斬て落し、六騎に手をおふす。七転八倒して相戦ふ。

横田嘉助ハ先夜の合戦にはつれ、活のこりたるを無念におもふ。「今度ハ是非に死なん物を」と、兜を取てなけ捨、大童に成て、鉄棒をおつ取のへ、当るを幸にうち倒す。その形相、鬼神の所為かとうたかハれ、更に喩に物なし。その外、三好、加藤の勇士、我も我もと踏込踏込、死に身に成て切まくる。さしもの琉兵たまりかね、散々に成て逃てけるを、つみて城へのり込間、和田藤右衛門、一番に城へかけ入、大音あげ、「佐野帯刀か次男主水政常、後詰の城の一番乗」と天も響けとよハわつたり。きくと等しく、秋月勢同音に時をとつと作りかけ、

微塵になれと責立る。新手の鋭気当りかたく、王俊以下ことごとく降人に成て 』54

去ほとに、新納大軍一同におしよせ、高鳳門をうちこへ、皇居をさしておそひうつ。その人々には、先鋒種か島大膳豊明、里身大蔵久英、畑勘解由道房、江本三郎左衛門尉重躬、松尾隼人勝国、秋月右衛門尉之常、佐野主水正常、これらを宗徒の将として、その外、惣軍後陣は新納武蔵の守、軍烈はなやかに隊伍をみたさず押とをる。

かかる所に琉将王李と書たる旗を真先におし立、三千斗の勢、道をさへぎる。先鋒種子島大膳、につことわらひ、「やさしき毛唐人かふるまひ哉。あれうちくたけ」と下知すれば、二の身にそなへし大島三郎左衛門忠久、二里波門定治、八島甚五左衛門豊宗、小松原左内左衛門忠信、陣をくりかへ真先に馬をいたす。つつみて里見、江本か兵、我うちとらんと進よる。王李 』55

か陣より、身の長抜群にたかき兵、指物に部達と書付たるか、只一騎、長き鉾を持、衆をはなれてよくよく戦ふ。小松原忠信、これを見て、物々しやとかけ来り、部達と渡り合い、火花をちらしきりむすぶ。されとも部達したたかなる猛勇なれバ、忠信爰にて討死す。八島甚五左衛門豊宗、敵に首をわたさじとはせ来り、引組んで落る所へ、八島か郎等おち合て、終に部達をからめ取、是より惣懸りに成て、終に敵軍をおつかへし、皇居をさして乱入る。

敵味方の射ちかふる矢は、秋の野の薄をミだし、砲玉の飛ぶ形相は

冬天の霰のことし。汗馬を馳違ひ、せいき南北にひきかへる。寄手の将士、勝いくさに競ひ、余りに深入して心ならず、うち死するも有り。敵中にも義を重し、名を恥る輩は、命を葵芥に比して防たたかひ、暫く時 』 56

をうつす所に、営中にこへ有て、「李將軍慶善、光録太夫陣跡、左將軍元祐、大司徒貞成、忠南帝候沢郎爺、その外、官士七拾三人、里見大藏、江本三郎左衛門の手へ生捕たり」と呼ハる。営中、斯のことし。況や下軍に於ておや。既に惣崩レニ成りて右往左往に潰乱す。

薩將、追々にかけて入、大王を生捕高名せんと爰かしたつぬれとも、更に行かたなし。爰に後軍、鈴木内藏助重郷の組下に吉崎宇右衛門、浜田郷助、兩人即時にはかつて、町人とさまをかへ、ひそかに町家小路などをうかこふに、焼残りたる寺あり。この中を不審におもひ、寺中へ訪ひ、元より兩人心ききの老者なれば、宰府子貢か弁舌をもつて、易々とばかり縲せ、相図の螺貝をふくとひとしく、内藏の助重郷、胴勢にて寺中へ込入り、王公官人以下、百八 』 57

十人、ひとりものこらす生捕り、大將の陣へ引。
新納即時に下知して、軍を納メ、所々に高札を建る。

掟

- 一 諸軍勢乱妨狼藉并押買之事
 - 一 女犯姦姪并焼亡ノ事
 - 一 高名之品可為実檢之支配并直參倍臣高下有間敷事
- 右條々、可相守。於違背之輩有之者可所嚴科者也。

諸卒是を見て、放て狼藉をなさす。国民、安堵かおもひをなす。爰におめて琉球一円に平靜す。

琉球平定詔 諸軍凱陣

去程に、武藏守本国へ早馬を以勝軍をうつたへ、夫より焼跡に陣屋を構へ、国中の仕置等堅ク申付、諸士へ触て首帳をしたたむ。 』 58

琉兵をうち取所の首級員

- 一 一種島大膳手の組へ 千二百一級
 - 一 佐野帶刀組へ 五千八十級
 - 一 里見大藏組へ 二千六百二級
 - 一 畑勘解由組へ 千五百十二級
 - 一 秋月右衛門組へ 一万百十三級
 - 一 佐野主水組へ 三千四百二級
 - 一 松尾隼人組へ 二千二百級
 - 一 三好典膳組へ 八百十五級
 - 一 江本三郎左衛門組へ 千七十一級
 - 一 花房兵庫組へ 六百七級
 - 一 花房小形部組へ 五百八十六級
 - 一 池田進左衛門組へ 百十八級
- 薩摩士討死
- 佐野帶刀政形 池田新左衛門国重
 - 小松原左内右衛門忠信 二見波門定治

横須賀久米右衛門

向坂与左衛門

関団之丞 『59

その外雑兵都合一千八百四十三人

凡此度の合戦、慶長十四年五月下旬よりの事なれハ、今年中もかかるべきを、同年七月下旬纔に六十余月に早定せしこと、是全く佐野帯刀、日頭山の一戦に一命を捨て花戦有しによつて也。かるか故に軍敗して後、武蔵守、佐野主水に對面あり、「今度政常か抜くんの戦功を賞し、且父帯刀、帝城一番乗の高名、義心絶倫の振舞なりとふかく感し、凱陣ののち忠賞かるるまし」と懇に勧慰す。是に依て正常忽心とけ、永く水魚の思ひをなす。

かくて島津家にハ新納か注進きくとひとしく、早馬をもつて駿府へこのむねを言上あかり、先々琉王を薩州摩へめしよせ、以来本朝へ帰伏すへきやいなやを、たつね究へしとの敵命なり。頓て琉球へ達し、急キ凱陣すへきよしや。武蔵守、惣軍へふれて、琉球所々の城番を定む。 『60

- 一 帝城 松尾隼人佐
- 一 高鳳門 篠原治部
- 一 早場 鈴木内蔵助
- 一 日頭山 佐野主水
- 一 乱蛇浦 秋月右衛門尉
- 一 米倉山 江本三郎左衛門尉
- 一 虎竹城 里見大蔵

一 千里城 畑勘解由

一 要浜灘 種ヶ島大膳

検守 島津采女 島津玄番

惣押 新納左衛門尉一俊（武蔵守嫡子）

武さしの守一氏、琉王以下の生捕を引具し帰国有る。その体誠に勇しく見へし。

斯て、太守、唐木の書院におみて對面、和睦合体の扨相すみ、ほとなく琉球守番の諸将帰国あり。忠賞衆行ハる。

同年八月、將軍家より使者至來す。「今度琉征早速勝利有、国王をとりこにし、日本へ歸 』61

伏せしむる條、希代の壮眞なり。依て兼約のごとく、琉球一円、島津支配たるへき」との敵命なり。島津家つつしんで拝謝し、即日琉王を伴ひ、駿府にいたり、君に謁し奉る。是より琉国永く日本へぞくす。

そのち寛文十一年七月、家嫡光久、琉球をともし將軍に、

琉球王書翰

謹而奉_レ捧_レ書翰_一。抑去年、薩州大守光久奉_二釣命_一、而予_カ嗣琉球国之爵位_ヲ、奉_レ述_レ賀_ヲ詞使小官、金武王就_二光久_一、献上不宜_ノ士里_ヲ伏、而翼、以諸大老指南_ヲ、可_レ達_二台聽_一儀可_レ仰、誠恐惶不宣。 寛文十一年五月 中山王尚貞

- 板倉内膳正殿
- 土屋但馬守殿
- 久世大和守殿

反簡

使義、金武来^テ致芳簡面ノ話ノ惟同^シ。抑去歳、薩州大守光久申達、琉球国伝封之儀、為安堵之加儀被献使者^ヲ。奉^レ之登堂^ニ、如数披露^レ之奉^レ備、台説^ニ之所使者被召出^テ、奉拜御前、御気色宜幸甚可被^ニ安堵、遠懷尚認^ニ使者畢不宜。

寛文十一年八月

從四位侍從兼内膳正源重矩

從四位侍從兼但馬守源教直

從四位侍從兼美濃守源宿祢正則

廻報中山館前 』 63

【付記】本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「異国合戦の歴史叙述―薩琉軍記―」にみる琉球侵攻―」（課題番号 25・9592）の成果の一部である。

（めぐろまさし 日本学術振興会特別研究員）